第4回

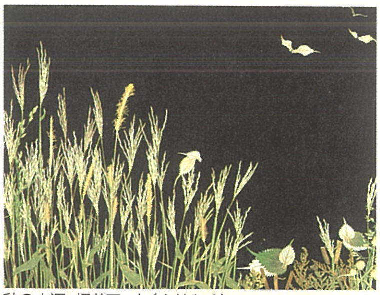
企画展 茨城の自然と芸術

辻永の画く植物の世界

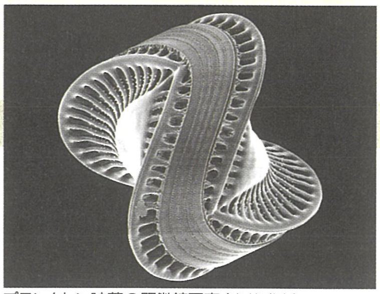
シモツケ（辻永）

Nature and Art of IBARAKI

1995.11.3［金］▶12.3［日］



秋の水辺：押花アート（小林きぬ）



プランクトン珪藻の顕微鏡写真（出井雅彦）

● **開館時間**
AM9:30〜PM5:00（入館はPM4:30まで）

● **休館日**
毎週月曜日（但し11/13(月)は開館、11/14(火)が休館）
※11/13(月)は茨城県民の日で無料入館日となります。

● **入館料**

小・中学生	120円（60円）
高・大学生	360円（240円）
大　　人	600円（480円）

※（　）内は20名以上の団体
［入館料は常設展・野外入場券を含みます。］

主催
ミュージアムパーク
茨城県自然博物館
協力
水戸市立博物館
茨城県近代美術館

▶ 次回企画展『菅生沼の自然・1996』● 1月13日［土］〜2月12日［月］

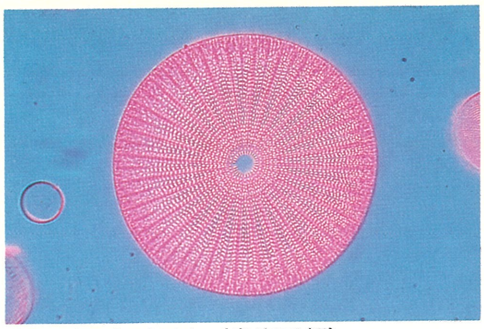
ミュージアムパーク
茨城県自然博物館
〒306-06 茨城県岩井市大崎700番地 TEL0297-38-2000
ハローダイヤル いばらき 029-226-8600 #8886（プッシュ回線）

茨城の自然と芸術

茨城の自然を芸術作品を通してみてみましょう。また、その芸術作品を自然科学的な観点からみてみましょう。

芸術の秋、そして文化のボーダレス時代と言われる今日、ミュージアムパーク茨城県自然博物館では、芸術作品について、本来の芸術的な価値と科学的な価値との相乗的な魅力を鑑賞していただくことをねらいとし、次の４部門からなる企画展を催しております。

1 生物のもつ美しさ ―造形の美―



クモノスケイソウ（鳥海三郎）

生物の形は、長い進化の歴史を経て築き上げられたもので、単なる形態的な美しさばかりでなく、機能的な美しさを備えるものも少なくありません。それらは、絶えず変わりつつある形態の一時の芸術と見ることができます。

ここでは、生物のもつ美しさを、(1)生物のからだの部分、(2)生物個体、(3)個体の群れの３つの視点からながめています。

2 植物で画かれた自然 ―ロマンの世界―

野山のステンドグラス（小林きぬ）

地元茨城に生育する植物から作られた押し花、それを用いて画かれた風景画やデザイン、そこには絵の具にはないような温かみや生命感が宿ります。

植物が鳥になり、家になり、そして草原や林になり…、それぞれの作品には、作者小林きぬさんのお人柄と共にロマンの世界が広がります。

3 植物画と植物 ―茨城の四季―

日本を代表する植物画家の一人、辻永、彼が描いた植物画は、日本ばかりでなく広く世界の植物におよび、その数は20,000点に達します。今回は、その中から本県に特徴的な300点の植物を選択し、一部には植物標本を添えて季節を追って展示いたしました。

辻永は、生涯にわたり花を画き続け、画家として、また植物学者として、当時の最先端の植物図鑑を発行しました。その作品には、芸術的・自然科学的な魅力とともに、植物に強い興味を持ち、そして山羊30頭を飼育した、自然を愛する人間辻永の内面を窺うことができます。

春

トウゴクサバノオ

夏

ソバナ

秋

コスモス

冬

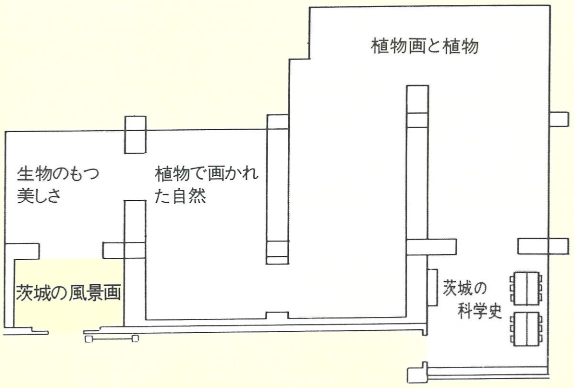
フクジュソウ

辻永（つじひさし）プロフィール

明治17年広島市に生まれ、生後７ヶ月のとき水戸に移り、上市尋常小学校（現五軒小学校）から水戸中学校（現水戸一高）に進みました。その後、東京美術学校（現東京芸術大学）を卒業し、明治41年渋谷に移り、そこを永住の地として創作活動を続け、昭和49年90歳の生涯を閉じています。

辻永は、穏やかな作風による風景画家として知られ、日展の初代理事長を務めるなど、画壇の重鎮として活躍し、また日本を代表する植物学者牧野富太郎等の解説による「萬花図鑑」、「萬花譜」計24巻の図鑑を出版しています。

4 茨城の科学史 ―科学を開いた茨城の先人たち―

本県は間宮林蔵をはじめ数多くの研究者・科学者を輩出しています。その中には、地元ならではの「粉コンニャクの発明」から、ノーベル賞にも匹敵するような「ジベレリンの発見」まで、素晴らしい様々な研究があります。きっと皆さんの地元出身の科学者もおられることでしょう。そして、10年後、20年後のこの年表に記されるのは、あなたの名前かも…。

展示平面図▼